

私の東京での学生生活には自転車が必要でなかった。上京したとき両親に買ってもらった二万円か三万円ぐらいの、買い物によく利用される自転車に、私は「赤兎馬」という愛称を付けていた。赤兎馬とは三国志に登場する「一日に千里を走る馬」のことである。私の赤兎馬はとても一日に千里を走る馬に匹敵するような代物ではなかったが、私はその赤兎馬にまたがり、暇を見つけては遠出し、生活やツーリングの足にしていた。

やがて、私が無事に学生生活を終えて帰郷し、社会人として勤めるようになると、私は自分への就職祝いのような気持ちで、赤兎馬にちなんだ赤い色のマウンテンバイクを購入した。もちろん、そのマウンテンバイクも赤兎馬と名付けた。

勤めてまだ一ヶ月も経たず、まだ初任給ももらっていないかったあの頃の自分にしては随分高い買い物であったが、私は就職後も暇を見つけてはサイクリングに興じていた。しかし、いつまでも学生気分でいられるわけもなく、仕事上の責任が増し、年月を重ねるにしたがって、いつしかそのマウンテンバイクのことも忘れるようになっていた。

今日は今朝から昨日の雨を忘れさせるようなカンカン照りだった。私は半ズボンとサンダルだけで、久しぶりに汚れた車を洗うことにした。今ではこの車が自転車に代わって私の生活を支えている。

うだるような暑さと太陽の光線が容赦ない。私はただそこにいるだけで汗がでてきた。車の泡を流しながら空に向けて放水してみるときれいな虹が現れた。あまりの暑さに私も虹のシャワーを浴びてみた。そのとき、なぜだかわからないが、私は納屋の片隅で眠っているマウンテンバイクのことを思い出した。

車を洗い終わった後、私は埃まみれのマウンテンバイクを引っ張り出した。変速ギヤや

チェーンは油がきれ、ところどころにさびが見えていた。久しくメンテナンスをしていないが、タイヤの空気は何とか残っており、かろつじて乗ることができた。最後にこのマウンテンバイクでツーリングに行ったのは五年前だろうか。

あの頃、私は仕事に追われ、日々の疲労やストレスと戦っていた。心身共におかしくなりそうなの自分の気晴らしにと、私は二日しかない休みを利用して二百km以上離れた友人に会いに行った。往復を考えると四百km以上の距離になり、二日で完走するのは容易でないことは十分に知っていた。別に目的地はどこでもよかった。ふらつと思いつくままに、そしてできるだけ無茶な旅を望んでいた。何も考えられなくなるくらい肉体的にきつい思いをした方が、すべてを忘れることができると楽だと思ったからだ。

あの日もカンカン照りだった。私は半ズボンにTシャツだけの軽装で、とてもツーリングの準備とはいえない必要最低限の荷物だけを持って出発した。案の定、そのツーリングは私の予想を遙かに超えた厳しいものになった。

サングラスもなく、真夏の太陽は私の目を射しているようだった。それまでトレーニングをしていたわけでもなく、私の体力はあつという間に消耗し、筋肉は次第に力をなくし、ペダルを漕ぐ膝の関節までもがギシギシと悲鳴を上げてきた。それでも、途中のコンビニエンスストアの店員が店に置いてある地図を広げて丁寧に道を教えてくれたこと、そして、幅の狭い割に車がひっきりなしに行き交う道で、行けども行けども自動販売機が現れなく、のどの渇きと戦っていたときに通りかかった交番で警察官がよく冷えたジュースをくれたことなどが、私にとって何よりの給水所だった。そしてそれがかるうじて走り出すエネルギーになっていった。

「おれも若い頃同じように旅したことある

んだよ。がんばってね。」

と、話しかける警察官の言葉が心に浸みだ。

私の自転車での旅は、あの、四国のお遍路巡りに近い心境だった。ペダルを漕ぐことは、今まで知らないうちに作ってしまった私の悪い垢を落としていく作業のようだった。とはいえ、旅は時間とともに辛さを増していった。ゆっくり自転車で走ればそんなに疲れることもないことは重々わかっていたが、私はそうしなかった。

私は小さい頃に座禅をしたことがある。無心になることを言葉ではわかっているけれどもそれができなかった。今でもできると言えば怪しいが、あのときは一心不乱にペダルを漕いで、辛さの中に浸っていれば無心になれる気がした。そうした時間が一時間、二時間と過ぎていった。

自転車に乗って前傾姿勢になっていた私に、太陽の光が直接目に当たるとくらいた陽が傾いた頃、どこからともなく空一面に黒い雲が広がってきた。予想通り、空からは大きな雨粒がぼたっ、ぼたっ而降ってきた。そしてそう思うのもつかの間、乾いた道路も畑も家も、そして私も怒濤の土砂降りと雷鳴にたじろいだ。初めの雨粒からたった数秒の間で一面は水の世界と化した。

私はちょうど通りかかった幹線沿いのラーメン屋の軒下に、慌てて立ち止まった。おそらく三十分ぐらいは雨が止まないだろうと思つた私は、腹ごしらえと雨宿りを兼ねてラーメン屋のれんをくぐつた。ごちんまりとした、目新しいものも特にない普通のラーメン屋で、私は入り口近くの窓際に席を取つた。そして、アスファルトの上で激しく砕ける雨粒を横目に、私はラーメンを頼んだ。

店には店主と思われるがっしりとした体つき男性が厨房にいた。つい数分前までずっと明るい外を走り続けてきた私の目は、店主が日に焼けて黒いのか、厨房が暗いのかかわからなかったが、その店主は粋の良さそうな三

十代から四十代といった年代に見えた。それほど広くないフロアには、高校生くらいのアルバイトが二人いた。チェーン店ではないらしく、二人のアルバイト生はそれぞれ不揃いのエプロンを掛け、慣れない接客をする姿が初々しかった。

私が注文して出されたラーメンを食べ終わっても、外は相変わらず土砂降りのままだつた。あいにく私はカッパを持ち合わせていなかった。それから十分くらいしても依然降り続ける天気にも、このままずっと休んでいる時間はないんだ」と自分に言い聞かせ、出発することを決めた。私はレジに行き、お金を払った後に、

「大きなゴミ袋をもらえませんか？」と尋ねた。

夕立ちはいつ降ってくるかわからない上に、降り始めるとんでもない勢いで降る。学生時代に自転車を乗っていて面倒なことのひとつが夕立だった。そんなときに学んだことがある。ゴミ袋でカッパを作るというものだ。私は傘などを差しながら危険な運転でゆっくり大学から下宿先に帰るよりは、服やリュックなど濡れると後々面倒なものだけを濡らさないようにして全力でペダルを漕ぐことを選ぶことが多かった。今はゴミ袋といえは半透明が一般的だが、当時は半透明のゴミ袋よりも柔らかな黒いゴミ袋を上下逆さまにし、首の穴と両腕の穴を開けると着心地もちょうどよいカッパになった。

私はカッパを作るためにアルバイト生にゴミ袋を要求したのだが、ゴミ袋が即席のカッパになるとはいざ知らず、若いアルバイト生は私の言葉の意味がわからずにキョトンとしていた。そして小さな袋を私に差しだそうとし、私は申し訳なさそうに、

「大きいものを……。」

と重ねて言った。そうこうしているうちにそんなやりとりを見かね、奥の厨房で見ていた店主がつかつかと歩み寄り、私に大きな黒い

ゴミ袋を差し出した。そして、

「これ、使ってください。」

と、私が手でゴミ袋に穴を開けるよりも早く、ハサミを差し出した。

「まだ休んでつていいよ、雨止んでないんだし。」

と、続けて言ってくれる店主の言葉を、私はまったく予想していなかっただけに、驚いた。『濡れた服で入ってくるから椅子が濡れたじゃないか』と言わんばかりの、一見強面こわもてな店主が優しい言葉をかけてくれただけではない、私がカツパを作ろうとしていることまで理解していたことがうれしかった。

以前、私がヒッチハイクの旅をしたときに、年輩の人が車に乗せてくれたことがあった。

『電車の方が早く着くんじゃない?』と聞かれたとき、「世の中には大切なものがたくさんあって、それを探しに旅をする。僕の心の中にも言葉では表せない大切なものが存在することを確かめたい」とは、こっぴどくかしくて言えなかった。

私はそれを確かめたくて、あえて辛い思いをして自分に挑戦していることを、その店主はわかってくれていたような気がした。私の方法は間違っているかもしれないが、そんな自分のやり方や考えを理解し、応援してくれるようだった。店主の予期せぬ言葉に驚き、私の頭の中ではいろいろな記憶が交錯していた。店主とのほんの一瞬のやりとりで、私は感謝の言葉すら言えず、ただ返事をするだけだった。

あのときの店主には申し訳ないが、正直なところ、あのとき食べたラーメンの味はほとんど覚えていない。疲労や不安と戦う私に美味しいとかまずいなんていう感覚はなかった。どんなラーメンを頼んで、どんな具が乗っていたかすらわからない。そのときの私はひたすらどんぶりの中身を平らげるだけだった。

店を出て、少し収まりつつある雨の中をマ

ウンテンバイクで走り出したとき、ようやく様々な感情がこみ上げた。あのラーメン屋に立ち寄り、疲労困憊ひろつこんばいで体の感覚が鈍感になっていた私は、舌の味覚神経で美味しいと思っただけでなく、また、満腹中枢でお腹がいっぱいになったというようなことを感じる余裕はなかった。ただ、あのラーメン屋を出たときに胸がいっぱいになっていたことは今でも覚えている。

「やっぱり夏は冷やし中華がいいなあ」と、縁側で昼食のメニューを考える家族の横で、私はピカピカに磨かれた赤兎馬あかうまを見ながら、もう一度、あのラーメンを味わってみたいと思った。